

[研究ノート]

ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』における 情動理論的研究

土屋 優

はじめに

ミラン・クンデラは現在様々な観点より論じられているが、その一つとして身体性が挙げられる。例えば工藤庸子は、クンデラ作品における身体と性愛の問題に着目し、それをフランス近代小説の歴史的な脈から論じている¹。またマージョリー・E・リーンは、『存在の耐えられない軽さ』の主人公の一人であるテレザの身体性にまつわるエピソードを取り上げ、そこから全体主義体制に対するある種の抵抗を読み取っている²。このように、クンデラ作品において身体性は重要な論点の一つとなっているが、一方で、『存在の耐えられない軽さ』の章につけられたタイトル「心と体」、「DUŠE A TĚLO」の「心」、「DUŠE」の問題はどのように論じることができるだろうか。本論考ではその試みの一端として、情動という側面からクンデラの『存在の耐えられない軽さ』を論ずることとする。情動 (affect) は人文社会系の批評理論の用語として使われる以前から、心理学や生物学の分野においていわゆる“感情”のように心の動きを意味する用語として用いられてきた。しかし、“情動” (affect) は“感情” (emotion) という言葉よりも、身体性との関係や伝染性という側面にフォーカスした心的強度を表す³。このような情動という概念に着目した研究は、理系文系の垣根を超えて近年広く行われている。特に2000年代中盤以降より、英米圏において批評理論として発達した。一方で、この情動理論は、何か特定の一つの流派や思想を形成する類の運動や理論ではなく、複数の解釈や分析的な手法を包括した緩やかな思想的支柱であると考えられる。そこで、本論考ではまず簡単に情動理論の潮流を整理し、その後『存在の耐えられない軽さ』を対象として作品分析を行う。

1. 情動理論研究とその潮流

前述の通り情動理論研究は、ある一つの確定したディシプリンがある訳ではない。それゆえ、各論者は自身の分野や研究対象に合わせて、様々な定義や方法で情動理論を用いるため、理論の定義化やカテゴライズは困難であるが、簡易的にまず二つの潮流に分けることができる⁴。一つはシルヴァン・トムキンズの心理学・精神生物学的系統であり、もう一方はスピノザに端を発し、ブライアン・マッスミやドゥルーズ＝ガタリが洗練させた社会学的系統である。前者において定義される情動は、外部の刺

激に対する神経細胞の反応のことを指す。人間はある刺激をそのまま感知することはできず、その刺激が翻訳されて情動としてフィードバックされているという生理学的プロセスに着目した研究となっている。それゆえ、ここでの情動は人間固有のものではなく、動物や自然界においても観察されるものであると定義されていることが特徴である。一方で後者は身体性をより重視しており、主観や意識の管轄を逃れた身体の生成変化という意味合いで情動という語を用いている。さらに、情動理論の論集である *The Affect Theory Reader*⁵ では、この二つの系統に端を発した八つのより細分化された分類が提唱されている⁶。今回はその中でも感情の拡散や伝染に着目し、自己に内面化された感情論に対する批判的アプローチとしての情動研究という方向性で、クンデラ作品を論じていくこととする。

2. 感情研究としての情動理論

実際にクンデラ作品の分析に入る前に、前述の感情論的情動理論に関してもう少し検討する。本論考ではこの系統に分類することができる二つの論を紹介したい。まずサラ・アフメッドの *The Cultural Politics of Emotion*⁷ は、政治学的、社会学的領域における感情の研究である。アフメッドは、これまでごく当たり前のように感情をある主体の所有物として見なされてきたことを指摘している。そしてこのような感情の定義によって、その主体に感情を引き起こした対象にある特定の価値がその本質として付与されてしまうことと、人種差別、移民排斥などの社会問題との関係を論じている。本書では、右翼系政治団体のポスターやオーストラリア政府による過去の人種差別に関する謝罪など、具体的な言説を愛や恥といった感情を切り口として分析している。その中で感情を、ある主体やその対象に属するものではなく、むしろそれによって境界や表面が形作られるものであるとする。そして、感情という語 (emotion)⁸ に宿る“動き”によって、拡がり、固着し、身体を他の身体と結びつける循環的な作用に着目する。

一方で遠藤不比人『情動とモダニティ 英米文学／精神分析／批評理論』⁹ は、文学作品や批評を中心に論じたものである。遠藤は、情動理論の展開を「英米文学、殊にモダニズム文学研究に不可逆的なインパクトを与えた」¹⁰ ものとして、情動という切り口より D・H・ロレンスやエドワード・オールビーなどの英米文学に留まらず、三島由紀夫やカズオ・イシグロなどの分析を行っている。本書において遠藤の用いる情動という語は、一九世紀に科学として制度化された心理学やそれとともに発展したリアリズム文学において、個人の所有物として抑圧、矮小化された“感情”から逸脱する過剰性として捉えられている。そしてこの過剰性は、たとえばオールビーにおいては「女の性」として、イシグロにおいては日本語訳におけるカタカナ、つまり日本的固有名詞として、様々な形で発露する。この抑圧しきれない過剰性としての情動は、

フロイト的心理学や冷戦下の核家族などといった様々な形をとる制度の内部を攪乱する力動的力を持っていると遠藤は主張する。

3. クンデラ作品における情動『存在の耐えられない軽さ』

以上の議論を踏まえて、実際にクンデラの作品分析に入る。本論考では『存在の耐えられない軽さ』を取り扱うが、それは本作において非常に顕著にアフメッドや遠藤が指摘したような情動をみることができるからだ。この小説はプラハの春前後を時代背景として、サビナとフランツ、テレザとトマーシュという二組の男女の関係を軸にした物語であるが、まずテレザとトマーシュの關係に着目したい。テレザとトマーシュは、テレザの故郷のとある田舎町で偶然出逢い、プラハで生活をともにすることとなるが、テレザはトマーシュの浮気癖に苦しめられる。彼女は嫉妬の苦しみを昼間は理性で抑えることができるが、夜、夢の中で苦しみを味わう。このような抑圧しきれない苦しみの発露としての夢は、作品中で繰り返し様々なヴァリエーションで描かれる。そもそも、夢というモチーフ自体が、フロイト的な情動、意識で抑えきれない不気味なものとしての情動であるが、この夢が作品中に繰り返し現れてくる過剰性という点からも、本作における情動性をみることができるだろう。さらに、この夢の描写において注目すべき特徴は、テレザの夢の苦しみをトマーシュも感じることである。まず第Ⅰ部7節で、テレザはトマーシュとサビナに性行為を見せつけられる夢をみるが、その夢の中で彼女は「精神の苦しみを肉体の痛みで止めようとして、針をいくつも爪の下に刺す。トマーシュに起こされたテレザはその夢を語り、『それ、とても痛かった』といって、本当にけがをしたかのように手を握ると、「トマーシュの眼前には、サビナのアトリエの壁に押し付けられて立ち、爪の下に針を差し入れるテレザが浮かんだ」¹¹と感ずるのである。このように、テレザの夢はトマーシュに強いヴィジョンを引き起こすのである。さらに、第Ⅴ部18節ではより明確にテレザの夢によってトマーシュに苦しみが引き起こされたことが示される。ここでテレザは自分が埋葬されており、そこをトマーシュが定期的に訪ねてくるという夢をみる。しかし、ある時トマーシュはしばらく来なくなる。彼女は、それはトマーシュが他の女と過ごしているからであると考えているが、トマーシュの訪問を逃してしまうことを恐れた彼女は、眠れずに幾夜も過ごす。そして、ついにトマーシュは再びテレザを訪ねてくるが、眠れなかったせいで自分が醜くなっており、それにトマーシュががっかりするのをテレザは感じる。眠れなかったと謝る彼女に、トマーシュは「ほら、君、休まないよ。一ヶ月の休暇を取らないとだめだよ」¹²と告げるが、テレザはその休暇中にトマーシュは女と会うとわかっており、そのせいでまた次に彼が来るまで眠れずに待ち続けるだろうと考える。この夢を聞いたトマーシュの反応は以下のように描写されている。

Neslyšel nikdy nic mučivějšího než toto vyprávění. Tiskl Terezu v náručí, cítil její chvějící se tělo a zdálo se mu, že není s to unést svou lásku.

Zeměkoule se může chvět výbuchy bomb, vlast může být drancována každý den jiným vetřelcem, všichni obyvatelé sousední ulice mohou být odvedeni k popravě, to všechno by snesl snadněji, než by se odvážil přiznat. Smutek jediného Terezina snu však nebyl s to unést.

.....

Srdce se mu svíralo; myslil, že je na pokraji infarktu.

この話より悲痛なものを聞いたことはなかった。彼はテレザを抱きしめ、震える彼女の身体を感じ、自身の愛を負うことができないように思えた。

たとえ地球が爆弾の爆発で震えても、祖国が毎日違う侵略者によって略奪されても、近所の通りの住人が皆処刑に連行されても、それらは全て、告白するよりもたやすく耐えることができるだろう。しかし、たった一つのテレザの夢の悲しみを負うことはできなかった。

.....

心臓がぎゅっとして、心筋梗塞寸前だ、と思った。¹³

以上のように、トマーシュはテレザの夢に非常に強い心的反応を引き起こされ、また、その心的動きによって身体的反応が引き起こされたことがわかる。この感情の個人所有性の否定は、遠藤の論やアフメッドの論でも論じられている。そして、そもそも情動理論が心的強度と身体性の関係を一つの切り口としていることを踏まえると、このテレザの夢とトマーシュの反応の描写は、強い情動性を帯びていると言えるだろう。さらに、前述の第I部7節の夢のエピソードから、語り手は、同情、チェコ語の *soucít* という語を分析し、第I部9節において哲学的論考を繰り広げる。前半、語り手は同情という語の語源に遡り、ヨーロッパのいくつかの言語を分析する。チェコ語やポーランド語、ドイツ語、スウェーデン語などのように、同じという接頭辞と感情を意味する語の組み合わせで同情という語を形成する言語と、ラテン語を起源に持つフランス語、英語、イタリア語のように、同情という語に苦しんでいる人への寛大さというような意味を含意する言語があると述べ、以下のような同情論を展開する。

To je důvod, proč slovo compassion vzbuzuje nedůvěru; zdá se, že označuje špatný, druhořadý cit, který nemá mnoho co společného s láskou. Milovat někoho ze soucitu znamená nemilovat ho opravdu.

V jazycích, které utvářejí slovo soucít nikoli z kořene utrpení (*passio*), nýbrž ze substantiva cit, slova se užívá v přibližně stejném smyslu, ale přece jen není možno říci,

že označuje druhořadý, špatný cit. Tajná moc jeho etymologie zalévá slovo jiným světlem a dává mu širší význam: mít soucit znamená umět žít s druhým jeho neštěstí, ale též cítit spolu s ním kterýkoli jiný cit: radost, úzkost, štěstí, bolest. Tento soucit (ve smyslu współczucie, Mitgefühl, medkänsla) znamená tedy maximální schopnost citlivé představitosti, umění citové telepatie; je to v hierarchii citů nejvyšší cit.

これが compassion という語が疑わしさを引き起こす理由であるが、何か悪い、愛とはほとんど共通するものがないような下位の感情であるかのように思われる。誰かを同情から愛するということは、その人を本当に愛しているという意味ではないのである。

苦しみ (passio) という語根からではなく、感情という名詞から同情という語を形成する言語では、その語はほぼ同じ意味で使われるが、ただし、下位の、悪い感情を意味するとは言えないのだ。その語源の秘められた力が単語に違う光を注ぎ、より広い意味を与えている。つまり、同情するということは相手の不幸を共に生きることができるということの意味するだけではなく、他のあらゆる感情を、喜び、恐れ、幸福、痛みを共に感じることなのである。この同情 (współczucie, Mitgefühl, medkänsla の意味での) は感情的想像力の最大値、感情テレパシーの芸術を意味するが、これは感情のヒエラルキーの中で最高位にあるのだ。¹⁴

このように、本作では感情の共有、感情の伝染が一つのモチーフ、作品の物語筋や哲学的考察を展開するためのテーマの一つとして扱われていることがわかる¹⁵。

一方、本作の重要なモチーフとして、時代背景となっているプラハの春が挙げられるだろう。クンデラの亡命以前あるいは亡命初期の作品は、主に祖国であるチェコの政治情勢を時代背景としているが、本作ではソ連軍の侵攻がストーリーラインを動かす重要な要素となっている。さらに、先にも引用したが、本作にはストーリーラインの展開とは別に語り手が哲学的考察を披露するパートが挿入されており、ソ連軍の侵攻や当時の史実的な出来事はその思索対象ともなっている。では、実際に作品中でどのように語られているか確認したい。

ソ連軍による占領の際、テレザは「幸福とよく似たある種の興奮状態」で過ごし、街で写真を撮り続けた。しかし、ドゥプチェックが連行されて運動が終熄することとなった頃、トマーシュはスイスへの亡命を持ちかけられる。彼はあれだけ熱心に写真を撮っていたテレザは拒否すると考えていたが、テレザは「ドゥプチェックが戻ってきてから、何もかも変わってしまった」¹⁶ と言い、プラハを離れようと提案する。ここで語り手が登場し、占領について私見を述べる。

Byla to pravda: ta všeobecná euforie trvala jen prvních sedm dnů okupace. Představitelé

země byli odvečeni ruskou armádou jako zločinci, nikdo nevěděl, kde jsou, všichni se třásli o jejich život a nenávisť proti Rusům omamovala lidi jako alkohol. Byla to opilá slavnost nenávisti.Žádná slavnost však nemůže trvat věčně. Rusové zatím donutili zatčené státníky, aby v Moskvě podepsali jakýsi kompromis. Dubček se s ním vrátil do Prahy a četl pak do rádia svůj projev. Po šestidenním vězení byl tak zničen, že nemohl mluvit, zajíkal se, lapal po dechu, takže uprostřed jednotlivých vět byly nekonečné pauzy, které trvaly skoro půl minuty.

それは事実であった。この共通した幸福感は、占領の初めの七日間しか続かなかった。国の代表者たちはロシア軍にまるで犯罪者のように連行され、彼らがどこにいるのか誰もわからず、皆彼らの命を思い震え、ロシア人に対する憎悪はまるでアルコールのように人びとを酔わせた。それは憎悪に酔った祝祭であった。……しかし、あらゆる祝祭は永遠に続くわけにはいかない。ロシア人は捕らえられた代表者たちに、モスクワで妥協書のようなものにサインするようその間強いた。ドゥプチェクはそれを携えプラハへ戻り、自身のスピーチをラジオで読み上げた。六日間の投獄の後、彼は話せないほどボロボロで、あえぎながら、息も絶え絶えで、それゆえ一つ一つの文の合間には果てしない間があったが、その間はほぼ三十秒も続いた。¹⁷

この記述でまず着目すべきは、ソ連軍の占領が単純に国を襲った悲劇としてではなく、「共通した幸福感 (všeobecná euforie)」や「憎悪に酔った祝祭 (opilá slavnost nenávisti)」などといった表現で描写されている点である。この場面において、まさに感情の社会的な広がりによって集団性が形成される様子が現れているだろう。さらに、この一連のエピソードは語り手のエッセイ的なパートや登場人物の回想など、形を変えて幾度も語られる。例えば語り手のエッセイパートでは、写真や映像といった切り口からより視覚的な表現がされているが、その中でも目を引くのは、ロシア兵の前で扇情的な行為をする若い女たちに関する言及である。ここで語り手は、「性的に飢えた哀れなロシア兵を挑発する信じられないほど短いスカートを履いた若い女たちがいて、彼らの前で通りすがりの見知らぬ人とキスをしていた」¹⁸と述べているが、このようなチェコの若い女たちの行為はアフメッドが指摘していた感情の循環により引き起こされた身体的接触の顕著な一例であろう。そして、先の引用後半部分のエピソード、ドゥプチェクが帰国し声明を発表するシーンであるが、この場面もまたテレザの回想という形をとって繰り返される。テレザは亡命先のスイスでドゥプチェクのラジオ放送を思い出す。ドゥプチェクはラジオの前で息も絶え絶えで、そのスピーチには長い間があったが、「その間の中に、彼らの国に降りかかったすべての恐怖があった」¹⁹と述べられている。ここでは、ラジオ放送の声、息遣いなどの身体的情報を通

して、恐怖という感情が国という単位で広く伝染したことがよく現れている。このような心的強度と身体性の密接な関係や感情の伝染性が現れているという点において、このエピソードは情動性を帯びていると言えるのではないか。加えて、この事件は話りの形を変えて本作に幾度も現れてくるが、この過剰性それ自体が遠藤の指摘する情動性だということもできるだろう。

以上のように本作においては、あるモチーフの繰り返し＝過剰性や、心的強度と身体性の関係、感情の伝染性などといった意味合いにおいて、情動性が宿っていると言えるだろう。では、この情動性にはどのような意味合いがあるのだろうか。

4. 結び

まず、本論考ではサラ・アフメッドや遠藤不比人の論を軸に論じてきたが、それに沿って考えれば『存在の耐えられない軽さ』に見られる情動は、すなわち十九世紀的リアリズム小説、あるいは小説の心理学化に対する異議申し立てであると読むことができるだろう。なぜなら、遠藤の論やアフメッドの論で情動は、十九世紀に制度化された心に関する“科学的”言説である心理学において規定されるような個人の所有物としての心的強度ではなく、そこからの逸脱性であると論じられており、遠藤の議論で見られるように情動を文学的議論の俎上に乗せれば、この制度化された心の科学である心理学と発展の軌を一にしたリアリズム小説がその意義申し立ての対象となるからである。ラブレーやセルバンテスに敬意を払うクンデラは、事実、小説の歴史において十九世紀リアリズムによってそれ以前の歴史との断絶が起きたと考えており、その克服の一つの方法として本作でも顕著に見られる夢というモチーフの使用²⁰がある。さらに、クンデラは若き日の評論²¹で、小説の心理学化を批判している。つまり、本作において情動がテーマの一つとなっていたということは、十九世紀的リアリズム小説の克服という意味合いがあるのではないだろうか。

さらに、もう一点、本作の情動の発露には二つのレベルがあることにも着目したい。分析の前半ではテレザとトマーシュという男女間の感情の伝染、そして、テレザという個人の夢に着目したが、一方で、プラハの春からソ連軍の占領という社会的な事件とそれを背景に起こり共有された感情も、本作においては重要な要素であることを確認した。つまり、個人の（そして男女の）関係という私的なレベルと、国という政治的なレベルにおいて、同じように情動が現れているのである。このように、私的なレベルと政治的なレベルにおこる出来事を、同じレベルで取り扱おうという姿勢は、本作を他の観点から分析した際も見られ、ルボミール・ドレジェルもクンデラの作品世界における政治と性（すなわち私的領域）が不安定に共存していることを指摘している²²。そして、この政治と私的領域の単純な二項対立関係とそこから生じる上下関係を取り崩すことは、政治的背景が大きな問題として扱われていたバルザックを筆頭と

した小説群に対する否定であると考えられるだろう。

しかし一方で、これら十九世紀小説の否定というクンデラのテーゼは、他の技法面からの分析や、エッセイなどでの発言からもわかる。では、情動理論的側面からクンデラを論じることにどのようなメリットがあるのだろうか。まず一点は、クンデラ作品全体を通じた分析が可能になることである。もちろん、エッセイなどの論は彼の作品全体をカバーするものであるが、技法面などは各作品違う部分も大きく、一貫した分析を行うことは難しい。しかし、ある種の一般性を帯びた情動という観点から論じることによって、作品群を通じて論じることができるだろう。またこの延長として、他の作家との比較を可能にするという利点がある。前述の通り、情動理論の応用によって技法の違う作品を同じプラットフォームに乗せて論ずることができる」と述べたが、それをさらに広げてゆけば、これまで比較の俎上に上がらなかった作家や作品との比較分析が可能になるのではないだろうか。現に、遠藤の評論はそのような意欲的な試みであった。元々英語圏で発達した理論であるため、やはり英米文学における応用が目立つが、さらに文学研究一般により広く応用可能な理論、あるいは分析の切り口なのではないだろうか。

以上、今後の展望を結びに替えて本論を終わりたいと思う。

注

- 1 工藤庸子『小説というオブリガード ミラン・クンデラを読む』東京大学出版会、1996年
- 2 RHINE E. Marjorie “A Body of One’s Own: The Body as Sanctum of Individual Integrity in Kundera’s *The Unbearable Lightness of Being*.” *Critical Essays on MILAN KUNDERA*. edit. PETRO Peter. New York: G. K. Hall & Co., 1999.
- 3 後述するように、情動理論研究では大別して二つの流れがあるが、両者ともに感情という心的強度の生成を身体的反応や身体への刺激を研究の起点としている。この二つの潮流は、アメリカ文学を情動（アフェクト）という観点で論じた論集である『身体と情動 アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』（竹内勝徳・高橋勤編、彩流社、2016年）においても紹介され、「こうしたアフェクト研究の勃興を受け、身体を中心としたアフェクト（情動）の表れやその変化、物質や他の身体との同調性、そして、それを起点とした身体の生成変化などが、文学研究においても注目されつつある（p.6.）」と述べられている。また、PMLAの2015年10月130号は感情（emotion）特集号となっているが、ここでは感情（emotion）という語を用いながらも、本論で紹介するような情動（affect）の特集となっている（事実 affect という語を用いている論文も掲載されている）。そして、その導入ではいくつかの主要な情動理論研究を紹介し、以下の引用のように感情（emotion）や気分（feeling）といった語と情動（affect）という語が、その他の身体や主体への伝染性という

点において区別されているということが示されている。”These theories and the critical practices to which they give rise tend to distinguish among emotion (as tied to a particular body or subject), and feeling (the subjective response to emotion), and affect which is often imagined as a quality that escape emotion and feelings because it does not belong to a particular body or subject but, rather, enables a bidirectional capacity to affect and be affected. (p.1254)”

- 4 GREGG Melissa, SWIGWORTH J. Gregory. *The Affect Theory Reader*. Durham, London: Duke University Press, 2010.
竹内勝徳・高橋勤編『身体と情動 アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016年
JENSEN Ann Katharine, WALLANCE L. Miriam. “Facing Emotion.” PLMA 130 [2015]: pp.1249_1268.
- 5 GREGG Melissa, SWIGWORTH J. Gregory. *The Affect Theory Reader*. Durham, London: Duke University Press, 2010.
- 6 八つの情動理論的分類を以下に記す。本文で述べたように、本論考では⑦の系統を採択し、論じる。(Ibid., pp6_9.)
 - ①人間あるいは人間以外の性質における古代的、超自然的行いに見られるアプローチ。現象学やポスト現象学などが含まれる。
 - ②①の系列ではあるが、より近代的なもの。サイバネティクスや神経学、人工知能の研究など。
 - ③非人文主義、非デカルト主義で、スピノザ主義的な文化的ジェンダー的制約を越えようとするアプローチ。フェミニズム、オートノミズム、カルチュラル・スタディーズなど。
 - ④生物学的見地を取り入れた心理学。③と類似しているが、カテゴライズする傾向にある。
 - ⑤一見政治的問題とは無関係だが、実際は深く結びついている理論。フェミニズム、クイア、障がい、サバルタン理論など。
 - ⑥ 20世紀後半の“言語学的転回”から距離を置こうとする動き。倫理的、美的領域に着目する。量子、神経、認知化学に影響を受けるような文化人類学、地理学、カルチュラル・スタディーズ、パフォーマンスアート、文学理論など。
 - ⑦内面化された自己や主観性を残した感情論への批判としてのアプローチ。世界形成、感情／情熱の拡散、群衆の振る舞い、感情の伝染などの観点。
 - ⑧科学分野、物質主義への多元的共存主義者のアプローチ。驚きや存在論的関係の混乱を排除しない科学。
- 7 AHMED Sara. *The Cultural Politics of Emotion*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2014.
- 8 アフメッドはあとがきで、情動 (affect) という語よりもより日常的な感情 (emotion) という語の方が自身の考えにあっていたと述べているが、基本的に彼女の論じている概念はいわゆる情動 (affect) に近いものであろう。現に彼女自身、情動理論家として見なされているということは自覚しており、同様に情動理論と近い立ち位置にあるフェミニズム理論やクイア理論の同僚からも示唆を得たことを認めている。(Ibid., pp204_210.)
- 9 遠藤不比人『情動とモダニティ 英米文学／精神分析／批評理論』彩流社、2017年

- ¹⁰ 同上、p.7。
- ¹¹ Viděl ji před očima, jak stojí přitisknuta ke zdi Sabinina ateliéru a vráží si jehly pod nehty. (KUNDERA Milan. Nesnesitelná lehkost bytí. Brno: ATLANTIS, 2006. s.24.) (筆者訳：以下特に断りのないかぎり翻訳は筆者による)
- ¹² ‘Vidíš. Musíš si odpočinout. Měla by sis vzít měsíc dovolenou.’ (Ibid., s.243.)
- ¹³ Ibid., ss.243_244.
- ¹⁴ Ibid., s.28.
- ¹⁵ 『存在の耐えられない軽さ』において、テレザの視点から語られた章は「心と体」という名が付いており、本論で紹介した夢というモチーフなどを用いながら、物語筋と並行して“心”と“体”の関係について考察されている事からもわかるように、情動は本作のテーマの一つであると言えるだろう。さらに一方で、もうひと組のカップルであるサビナとフランツの間では、お互いの無理解や感情のギャップが描かれており、“感情のテレパシー”が楽観的に信じられている、もしくは絶対化されているという訳ではない。このように異なるカップルの関係を通して感情の伝染という情動をまた違った角度より検討している点からも、本作において情動は一つの重要な考察の対象となっていることがうかがえる。
- ¹⁶ ‘Od té doby, co se Dubček vrátil, všechno se změnilo’ (Ibid., s.34.)
- ¹⁷ Ibid., ss.34_35.
- ¹⁸ ……mladé dívky v neuvěřitelně krátkých skních, které provokovaly ubohé ruské vojáky, sexálně vyhladovělé, a líbaly se před jejich očima s neznámými kolemjdoucími. (Ibid., s.81.)
- ¹⁹ V těch pauzách byla celá hrůza, která dopadla na jejich zemi. (Ibid., s.86.)
- ²⁰ 夢の呼びかけ——十九世紀の睡りこけていた想像力は、突然、フランツ・カフカによって睡りからさまされました。カフカは、シュールリアリストたちが実際に達成することのないままに彼につづいて要請したものを、つまり、夢と現実との融合を作り出すことに成功しました。事実、これはすでにノヴァーリスが予感していた、小説の古い美的野望ですが、この野望を達成するためには、錬金術の技法が要求されます。そしてカフカだけがこの技法を百年後に発見したのです。この大きな発見は、小説の進化の完成というよりはむしろ、ひとつの予期せざる開始であって、これによって私たちは、小説とは想像力が夢のなかでと同じように爆発しうる場であることを、そして見たところ抗しがたいもののように見えるほんとうらしさの要請から、小説は自由になることを知るのです。
『小説の精神』ミラン・クンデラ著、金井裕・浅野敏夫訳、法政大学出版局、1990年、p.19]
- ²¹ KUNDERA Milan. *Umění románu: Cesta Vladislava Vančury za velkou epikou*. Praha: Československý spisovatel, 1960.
クンデラはこの評論の中で、全体性や歴史性を失ったバルザック後の小説では、ジャーナリズム的小説と内省的小説が主流となり、後者の内省的小説は心理描写に特化した小説であると考えている。そして、その細かく描きこまれた心理描写によって物語の詩的性質や出来事に対する驚きなどが失われているのではないかと述べている。
- ²² DOLEŽEL, Lubomír. *Studie z české literatury a poetiky*. Překl. Bohumil FOŘT. Praha: Torst, 2008, s.107.

Study of Milan Kundera in Affect Theory

Yu Tsuchiya

This essay aims at applying the affect theory to the analysis of Milan Kundera's works. The word "affect" was originally used as jargon in the disciplines of psychology and biology. Mid 2000s onward, it came to be used to describe a critical theory. However, the affect theory is not a conceptual construct or movement that forms a school of thought; rather, it is an ideological prop that is used to comprehend several interpretations and methods. The affect theory incorporates two streams: the psychological and biological type postulated by Silvan Tomkins and the sociological type that was introduced by Spinoza and later elucidated by Brian Massumi and Deleuze & Guattari. The theory can be further subdivided into eight branches and this essay selects studies that focus on emotion for their analysis.

The paper first discusses *The Cultural Politics of Emotion* by Sara Ahmed. This work is a study of emotions in political and sociological fields. Through analysis of actual speeches, Ahmed demonstrates how emotions move, stick, and shape the surfaces. The paper then discusses *Affect and Modernity: Literature/ Psychoanalysis/ Theory* by Fuhito Endo. He defines affect as the "excess of emotion" that was suppressed and minimized as one's property in psychology that was institutionalized in the 19th century as well as in the literature of realism that developed alongside it. Subsequently, Endo analyzed several works from point of view of this "excess." Based on these studies, the present paper examines Milan Kundera's *The Unbearable Lightness of Being*. It finds two levels of affects in the text. The first is between two individuals called Tomas and Tereza. Tereza's dreams are reflections of her jealousy and pain, and her dreams cause Tomas suffering. This emotional contagion can be considered the affect. This motif of dreams is repetitive, and the excess is the affect that Endo indicated. The second is the social level. In this novel, the Prague Spring and the Soviet invasion are important elements that are repeatedly described. In these descriptions, the Soviet invasion was not simply a tragedy. It was carnival of hatred toward the Soviet army and simultaneously a peculiar happiness was shared among people. After these carnivals, Dubček was kidnaped and forced to deliver a speech on the radio. A narrator says that Dubček speech represented the fear that gripped the country. The novel describes how emotions circulate in the nation.

These affects depicted above form the antithesis of the literature of realism of the 19th century and counter its objection to psychological literature. The application of the affect theory is beneficial to comprehensively analyze Kundera's works and compare them with works of other authors.